

オンライン版 虚子記念文学館所蔵 近代文学作家自筆資料集

価格¥300,000（税別）

- ・ 原本：公益財団法人 虚子記念文学館
- ・ プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター
- ・ 完全買切型（ご購入後のプラットフォーム利用料、年間維持費用は不要です）
- ・ ご契約の際は、所属機関のIPアドレスが必要となります。
- ・ 無料トライアル受付中。お申し込みはkenkyushien@maruzen.co.jpまで



虚子記念文学館が所蔵する近代文学作家の自筆資料を横断的に利用できるデータベース

明治～戦前期までの資料を対象とし、高浜虚子、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、正岡子規、佐藤春夫、長塚節など、日本の近代文学を牽引した 60 名以上の作家の自筆資料約 450 点を収録。

直筆原稿類は、夏目漱石「吾輩は猫である」をはじめ、高浜虚子、伊藤左千夫、小川未明、鈴木三重吉、小宮豊隆、安倍能成など、『ホトトギス』に掲載された小説や評論が中核をなす。また、正岡子規の「仰臥漫録」、「病牀手記」も完全収録。子規最晩年の日記である「仰臥漫録」は、色彩豊かな子規の画と文をフルカラーで原本を手取るように閲覧できる。書簡類は、夏目漱石、正岡子規を中心に、芥川龍之介、幸田露伴、佐藤春夫、そして 2018 年に発見され話題となった森鷗外 の全集未収録書簡等の新史料も含まれている。そのほか、虚子記念文学館ならではの資料として句会稿も複数収録。子規が毎月自宅において開催した句会は、漱石、鷗外、虚子らの文学的交流の場であった。明治 20 ～ 30 年代の活発な文壇の様子を窺うことができる貴重史料である。さらに、浅井忠の絵葉書や、ホトトギスを支えた洋画家・中村不折、岡本月村らの挿絵等も収録。近代文学はもとより、近代美術史、出版文化史の分野においても必備の資料集。

オンライン版

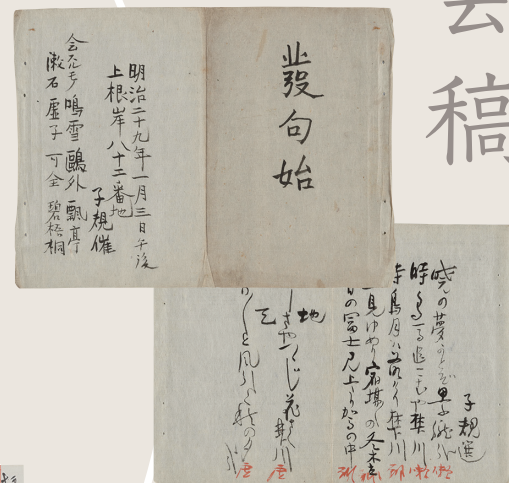
虚子記念文学館所蔵

近代文学作家自筆資料集

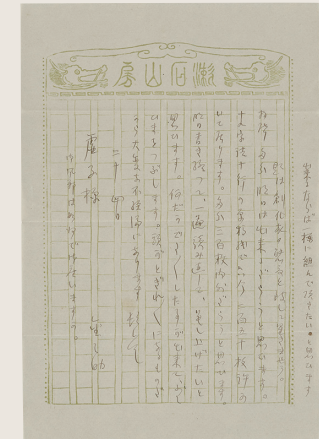


下村為山画／河東碧梧桐識「明治三十一年、二年頃の子規庵新年句会図」

句会稿



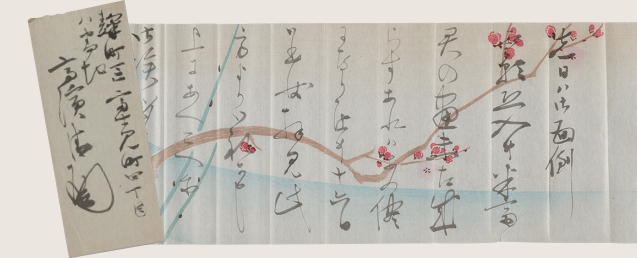
▲新年句会稿「発句始」
(明治29年1月3日、子規庵)
参加者は子規・虚子・漱石・鷗外・鳴雪・飄亭・碧梧桐・可全（碧梧桐兄）。まだ無名の英文学者であった漱石が参加している貴重な句会稿。



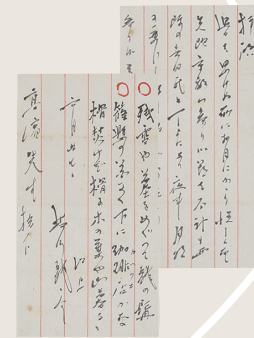
▲高浜虚子宛夏日漱石書簡
(明治41年3月24日)



▲正岡子規宛浅井忠絵葉書
(明治34年9月23日)
病床の子規に宛て、浅井忠がパリの景色を描いた絵葉書。浅井忠・呉秀三・和田英作・満谷国四郎4名の寄せ書き。「仰臥漫録」に所収。



▲高浜虚子宛森鷗外書簡（明治39年2月22日）
「うた日記」選句への謝意を述べたもの。鷗外全集未収録。



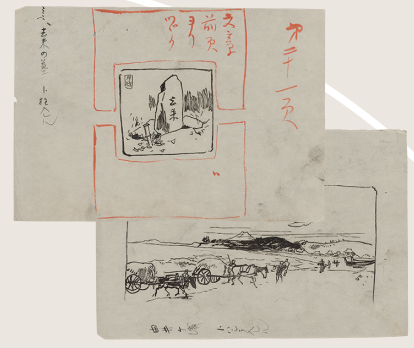
▲高浜虚子宛芥川龍之介書簡
(大正8年6月27日)

書簡

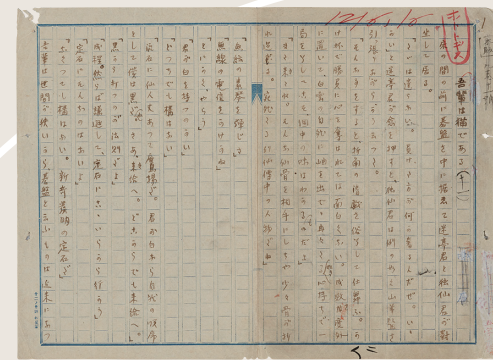
明治から昭和戦前まで作家の息遣いを今に伝える珠玉の自筆資料群

書簡は、虚子が最も大切に遺していた子規と漱石からの叱咤激励の100通余をはじめとして、森鷗外、芥川龍之介、長塚節、陸羯南、内藤鳴雪、浅井忠、小川芋銭と多岐にわたり、それぞれの自筆から、作家や画家達の豊かな個性を看取することが出来ます。さらに明治中期の日記文学の白眉である、子規晩年の日記「仰臥漫録」2冊も収録。子規が画家・中村不折からもらった絵具は高品質であったため、鮮やかな色彩のスケッチが再現されています。

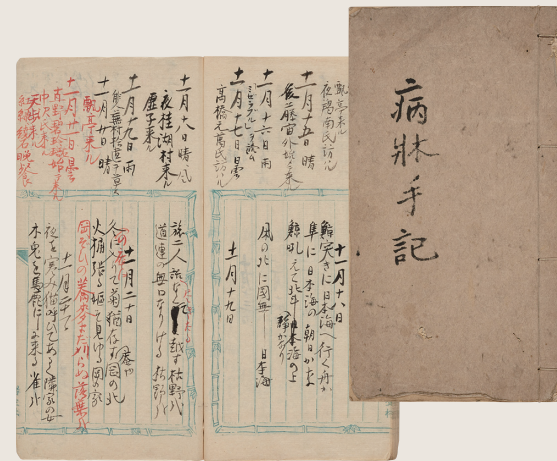
西暦2000年の開館以来、今年で20年の節目を迎える当館は、今後も所蔵資料の保存及び公開に努めてまいる所存ではございますが、このオンライン版の刊行によって、より多くの方々に当館資料を御活用いただき、俳句のみならず、文学や美術等、種々のジャンルの研究に御役立ていただくことを、切に希望しております。



▲「吾輩は猫である(9)挿絵」
上：岡本月村画「去來の墓」／下：中村不折画「由井ヶ濱」



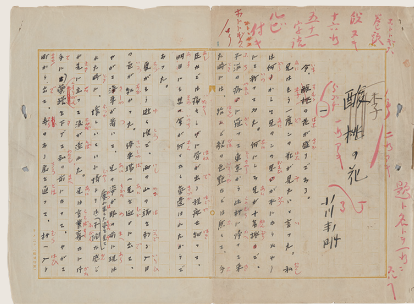
▲夏目漱石「吾輩は猫である(11)」最終章原稿
(明治39年)



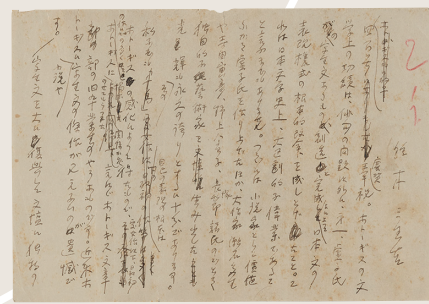
▲正岡子規「病牀手記」(明治38年8月2日～11月21日)



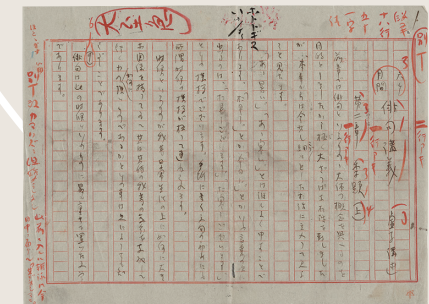
▲正岡子規「仰臥漫録」(明治34年9月2日～明治35年9月3日)
大韓帝国皇帝から下賜されたチマチョグリのを着る少女(陸羯南の娘)を描いたもの。左上に「芙蓉ヨリモ朝顔ヨリモウツクシク」と詠んでいる。



▲高浜虚子「六ヶ月間俳句講義」(大正2年)



▲小川未明「李の花」(大正5年)



▲鈴木三重吉「ホトトギス四百号」(昭和4年)

原稿

刊行にあたって

このたび、俳人 高浜虚子（1874～1959）が所蔵していた貴重な自筆原稿や書簡等、約450点が収録された、『オンライン版 虚子記念文学館所蔵 近代文学作家自筆資料集』が刊行の運びとなりました。

松山出身の虚子は、同期の河東碧梧桐と共に、同郷の先輩である正岡子規に俳句を主とした文学指導を受け、明治31年10月からは、俳句を主とする月刊文芸雑誌「ホトトギス」の編集発行人となりました。この俳誌「ホトトギス」は現在1480号を突破し、今なお脈々と継承されています。従って、このオンライン版に収録された自筆原稿には、「ホトトギス」に掲載された短編小説や写生文、評論等が多く、中でも子規写生文「飯待つ間」や、夏目漱石の作家デビューのきっかけとなった「吾輩は猫である」ペン字自筆原稿（9章と最終11章）といった明治期の第一級資料が多数含まれています。また充実の虚子宛

手稿の宇宙、その輝き ― 近代文学作家自筆資料集に寄せて

早稲田大学教授 宗 像 和 重

正岡子規の「仰臥漫録」は、最晩年の病床日録で、二つ折りの半紙を紙綴で綴じた二冊から成っている。それを子規の枕元で実見した高浜虚子は、雑誌『ホトトギス』の消息欄に、「仰臥のまま一行二行づつ位筆を取り何くれとなく認むるもの、写生の色彩画あれば、俳句あり、御馳走の記事あり、『墨汁一滴』の更に短きが如きものにて甚だ面白く覚え候」と記し、「行く行くは本誌に掲載の榮を得べく候」とも続けている。実際には子規の没後に掲載されたが、この時虚子が味わった面白さが、そのまま伝わったかどうかはわからない。「仰臥漫録」の「仰臥漫録」たるゆえんは、苦痛にあえぎ、寝返りもままならない中で「仰臥のまま一行二行づつ位筆を取」る、その筆の跡にこそ存在しているからである。

もとより、日本の近代文学が、新聞や雑誌などの新しい活字メディアを媒介とした「活字的世界」（前田愛）のうえに成り立っていることは、言うまでもない。言葉は活字によって広く流通し、多くの読者を獲得することになったけれども、目を凝らしてみれば、その「活字的世界」の背後には、原稿やノート、書簡や日記などを始めとする、広漠たる手稿の宇宙が広がっている。それらは、活字のテキストを読み解くための貴重な資料であるばかりでなく、その用箋や筆記具、筆跡や書き癖など、一回限りの「アウラ」（ベンヤミン）を帯びた輝きを放ちながら、言葉で表現することの喜びと苦しみを、ありありと私たちに伝えてくれる。

このたび、この「仰臥漫録」や夏目漱石「吾輩は猫である」最終章の原稿、『ホトトギス』にまつわる諸家の書簡など、虚子記念文学館所蔵の数百点に及ぶ自筆資料が、オンライン版で配信されるという。『ホトトギス』が育んできた、言葉と友情の足跡が一望できる。なんという壮観だろう。近代文学や関連諸分野の研究に大きな恩恵をもたらす朗報であることはもちろんだが、むしろ私には、言葉に憑かれた「筆の虫」たちの蠢くさまを、精細なカラーで、まじまじと観察できることが何よりもうれしい。